

## 第13回「泉大津市オリアム随筆賞」

### 【オリアム随筆賞（優秀賞）】

織りゆく命

浅野 理恵・福島県郡山市

珍しく旅行先へ向かう車の中は、とても静かだった。いつもなら小学一年生の娘が、学童での出来事やゲーム・漫画のことを次から次へとおしゃべりするからとても賑やかなのだ。その静けさには理由があった。

旅行へ出かける三日前に私と娘は、総合病院の待合室にいた。それは検査入院の検査結果を聞くためだった。娘と私たち夫婦は、ずっと娘の身長が伸びないことを気にしていた。今までは小規模の保育園に在籍していたため、娘自身が身長について深く悩むことはなかった。しかし、小学校へ入学して、百人近くいる新入生の中でも一・二を争う自分の小ささを目の当たりにして、娘は思いのほかショックを受けていた。母親である私も知識としては分かっていたが、現実を見ると、正直なところ、やはり普通ではないのだなと実感して、胸が痛くなった。娘は、身長が小さくても他の児童のようになんでもできるようになりたいという気持ちが強かった。しかし、実際は体格差などからうまくできないことも多かった。そして、一学期を終える頃には、娘の自己肯定感はだんだんと低くなっていった。以前は周囲の友達に「チビ」などと冷やかされても言い返していたが、それもしなくなつたようだった。親としてもなんとかしなくてはと、あれこれ策を練つたが、どれもあまり効果はなかった。そして、低身長の精密検査をすることになった。結果は、成長ホルモンは正常に出ており、父親の身長が低かったため、家族性低身長症と診断された。娘の背が伸びないのは病気ではなく、遺伝による個性だった。私は、大きな病気がなかった事実にあ堵したが、娘の反応は複雑だった。家族性低身長症は、成長ホルモン治療の適応外なのだ。病院からの帰り道にぼつりと娘が言った。

「検査大変だったのに、結局私のチビは治らないんだね。これからずっとチビの人生なんだ」私は、その言葉に雷が落ちたような衝撃を受けた。「チビの人生」だと思わせてしまったのは、私たち親であり、娘は何一つ悪くない。娘に生涯背負い続ける業のようなものを背負わせてしまったと感じた。娘は、それから数日、なにかを考え込んでいるようで、あまり自分から話そうとしなかった。夫は、娘の低身長は自分のせいだと分かると、仕方ないと言いつつも落ち込んでいる様子だった。そして、家庭内が重い空気のまま、旅行の日を迎えた。

私たち親子は、福島県昭和村を訪れた。工作が大好きな娘に、からむし織体験というものがづくりを体験させてあげたかったからだ。からむし織は、昔ながらの機織り機で反物を作るこの地域に伝わる伝統的な織物だ。からむし機は、イラクサ科の多年草のからむしから長い年月をかけて、糸を作り、織り上げる、福島が誇るとても手間暇がかかる芸術品だ。昭和村

にある道の駅でからむし織体験ができること知り、旅の一つの思い出になればと家族で挑戦した。

体験場所の織姫交流館を訪れると色とりどりの反物が並んでいた。体験コーナーで早速からむし織体験が始まった。織織り機には、予め縦糸がセットされていた。糸がまかれた木の道具を縦糸に通して、箆を手前へ打ち寄せて少しずつ布ができていく。ギューントントンという音が何度も鳴り響く。最初は浮かない顔をしていた娘が少しずつ笑顔になる。作業が楽しいようで、私の顔も自然とほころぶ。すると、夫が口を開いた。

「機織りって、命みたいだね。縦の糸はパパで横の糸はママ。それでこのきれいな布は子供みたい」

その言葉に娘が応える。

「うちは、縦の糸が短かったんだね。でも、できる作品はきれいだね。それなら私も素敵になれるのかな」

すると、私と夫がほぼ同時に言った。

「もちろん、世界で一番素敵で大事だよ」

その言葉に娘は、嬉しそうに頷いて、黙々と織り始めた。その姿に夫が言う。

「パパのせいで小さくなってごめんね」

娘は、小さく首を横に振った。私も思わずこう言った。

「ママの小さくない遺伝子が頑張れなくてごめんね」

その言葉に娘も夫も一斉に吹き出した。

「なにそれ」

そう娘が言うとその場が一瞬で和んだ。しばらくすると、淡い上品な色合いのからむし織コースターが出来上がった。とても軽くてきれいだった。なんだか久しぶりに三人の笑顔が並んでいることがとても嬉しかった。コースターを大事に鞆にしまい、私たちは道の駅を後にした。たしかに家族は、織物のようだ。我が家は、これからどんな素敵なおしゃべりに聞き入るのだろうか。ワクワクしながら、帰り道は娘のおしゃべりに聞き入った。